HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	巻頭言: コンテンツツーリズム論の構築を目指して
Author(s)	山村, 高淑
Relation	観光資源としてのコンテンツを考える : 情報社会における旅行行動の諸相から = Current Issues in Contents Tourism : Aspects of Tourism in an Information-Based Society
Citation	CATS 叢書, 7, i-ii
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49629
Rights	© 2012 山村高淑
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	other
File Information	CATS07_001.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

巻頭言：コンテンツツーリズム論の構築を目指して

山村高淑[1]

本書は、北海道大学観光学高等研究センター文化資源マネジメント研究チームが 2008 年 7 月より実施している学内外の研究者との共同研究「メディアコンテンツと地域振興のあり方に関する共同研究」「コンテンツツーリズムの総合的研究」の成果の一部を取りまとめたものである。

これまで本研究チームは、鷲宮町商工会（2010 年 6 月より鷲宮商工会に改称）との共同研究の形で、『メディアコンテンツとツーリズム』（CATS 叢書第 1 号：2009 年）、『次世代まちおこしとツーリズム』（CATS 叢書第 4 号：2010 年）の二つの成果報告書を取りまとめ、世に問うことができた。観光研究に関わる実社会のニーズも考慮し、紙媒体と Web ジャーナル双方の形式で公表したこともあり、幸いにして多くの方々から貴重なご意見・ご指導を頂くことができた。本書はこうしたこれまでの共同研究の蓄積の上に生まれたものである。

人は物語（＝コンテンツ）を求めて旅をする。そしてある物語を共有したとき、人と人は交流が可能になる。このことは「旅」の持つ文化的な本質のひとつではないだろうか。

現在、旅行市場は成熟し、人々の趣味や嗜好の多様化にあわせて市場自体も細分化が進んでいる。それに従って、旅行者や自治体も、「コンテンツを求める」という旅の本質に気付き始めた。観光資源とは単なる「モノ」ではなく、その奥にある、地域の「物語性」であるということに気付き始めたのである。言い替えれば、その土地の持つ世界観や、その土地を舞台にした作品や歴史の「物語性」に浸る旅のあり方、そしてそうした「物語性」を他者と共有することで生まれる交流のあり方に注目が集まっているのだ。私自身は、こうした旅のあり方を「コンテンツツーリズム」と呼びたいと考えている。

一方、「まちおこし」という言葉も良く聞かれるようになった。ある地域を活性化させるための取り組みのことを一般にこう呼ぶことが多いのだが、私は、特に以下のように具体的に定義することで、論点を明確にすべきではないかと考えている。「その集団、あるいはひとりひとりが持っているもの（自然環境、文化遺産、創造性など）を、集団内や他地域の人々と交流することによってより豊かにしていくこと」。

---

[1] 北海道大学観光学高等研究センター・准教授

2007 年に始まった埼玉県旧鷲宮町の『らき☆すた』をきっかけとしたまちおこしは、こうしたコンテンツツーリズムがまちおこしへと展開した好例であり、全国の自治体の地域振興のあり方にも大きな影響を与えた。特に、『らき☆すた』ファンと地域住民との交流・協力関係がまちおこしの大きな原動力となったこと、商工会と著作権者とが双方の利益に配慮したコンテンツ活用モデルを構築したこと、様々な関係者をどんどん巻き込んでいくことで次々と新たな文化が創造されていること、などは、今後の交流型まちづくり、地場産業振興、コンテンツ産業振興を考えていくうえで、関係者に大きな示唆を与え続けている。

しかしながら、こうした社会的なニーズがあるにも関わらず、コンテンツツーリズム研究は学問的にも緒に就いたばかりであり、情報や知見の蓄積は未だ不十分な状況にある。また、アニメ作品やマンガ作品に対する偏見がこうした研究の進展を阻害しているという現実もあり、体系立てられた理論の構築へ向けた動きもなかなか進んでいない。

こうした背景を踏まえ、本書では、複数の事例から、コンテンツをめぐる旅の諸相を浮かび上がらせることで、観光におけるコンテンツの持つ意味を多角的に提示してみたい。そしてそうすることによって、今後、来るべき情報社会におけるコンテンツツーリズム論の確立に向けて、その方向性と課題を少しでも指し示すことができればと考えている。

本書の執筆に当たっては、学内外から、上述したような主旨に賛同頂いた、コンテンツツーリズム研究に携わる多くの若手研究者の方々に共同研究者としてご参画頂いた。いずれの執筆者も、地域社会や旅行者への綿密なフィールドワークを通して、独自の視点からコンテンツと旅に関する諸相を解き明かす試みを展開しており、非常に刺激的な論考集となった。コンテンツツーリズムを通して地域振興を目指す関係者の皆さんにとって、何らかのお役に立つ情報をお伝えすることができれば、望外の喜びである。

もちろん、先に述べた通り、本書はコンテンツツーリズム論の創造に向けたひとつの試論であり、提示された論点は今後の多角的な検証を経て、一般化を目指していかなければならない。読者諸賢のご批評を乞う次第である。